

(一財)北海道開発協会では、2015年12月4日に当協会6階ホールで、「北海道の歴史・文化と観光」をテーマに第11回助成研究発表会を開催しました。会場には、60名を超える多くの方々にご参加をいただき、各研究発表後、フロアを交えた活発な意見交換が行われました。

第11回助成研究発表会 北海道の歴史・文化と観光

クローズアップ①

(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所



草苺 健
(一財)北海道開発協会
開発調査総合研究所長

北海道開発協会は、昭和38年に北海道開発の推進と開発関係者の福利厚生を増進を図る目的において設立され、3年前に一般財団として再スタートしました。公益事業の中心となる北海道開発に関する調査研究では、ソーシャル・キャピタル、インバウンド、コモンズ等をテーマに実施しています。

協会が実施している公益事業は、これら調査研究のほか講演会、研修会、協賛助成があり、助成事業には地域で活性化活動を行う団体への活動助成と高等教育機関の研究者に対する研究助成の二つを行っています。

この内、研究助成は平成14年以来、毎年30~40件の申請があり、27年度までに402件の応募を頂き、内117件、270名の研究者へ助成を行ってきました。

今回の第11回助成研究発表会では、過年度の助成研究の中から「北海道の歴史・文化と観光」をテーマに関連性のある3件の研究を選定しました。観光として食・景観・温泉のみならず、北海道の歴史文化が注目され始め、北海道が誇るべき資源として歴史文化の発信の必要性が高いということがテーマの背景にあります。

各々個別の研究ではありますが、最終的に一つの方向性として、これからの北海道の観光と地域振興に関するヒントやテーマが見えてくるものと期待しております。



研究発表 1

北海道における先住民文化遺産観光の展開可能性に関する比較研究^{※1}

アイヌ文化振興と観光



岡田 真弓 氏
北海道大学創成研究機構
特任助教

北海道に先住し、独自の文化を發展させてきたアイヌ民族は、日本の同化政策により、文化・生業・共同体に多大な打撃を受けてきました。1997年にアイヌ文化の振興と普及を目的とした法律が施行されて以来、アイヌ政策が産学官民で多角的に進められています。

2020年には、アイヌ文化を伝承共有できる「民族共生の象徴となる空間」の建設が予定され、北海道観光においてアイヌ文化が「大自然」や「食」といった従来の魅力に替わる新たな要素として期待されています。

アイヌ文化は独特の精神文化、口承伝承、舞踏や音楽といった無形文化遺産が特徴です。一方で、無形文化遺産をいかに観光の中に組み込み、文化交流の手段として活用するかについては議論が尽くされておりません。本研究では、アイヌの歴史・文化を有効的に観光に組み込み、生業として成り立つ先住民文化遺産観光のあり方を検討しました。

沖縄県と北海道における遺産観光への取り組み

沖縄県は、一般的な日本史の趨勢とは一線を画す歴史・文化を發展させ、その独自性を活かした観光開発を行っています。2000年には、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界文化遺産に登録され、沖縄の歴



高崎 優子 氏
北海道大学大学院文学
研究科博士後期課程

※1 本誌2015年7月号12ページ参照。

史・文化が高く評価されました。独自の民族文化・歴史を活用した観光発展の先駆的な存在である沖縄では、市町村の文化財課担当者、ガイドツアーを提供する事業主およびガイドにヒアリング調査を行いました。

文化遺産ガイドの重要性

観光活動を通じて先住民文化遺産が適切な文化交流手段となるためには、文化遺産ガイドの存在が重要となります。沖縄では、専門観光ガイドに加えて、県民教育の一貫として育成された市民による文化遺産ガイドが活発です。各自治体がガイド養成講座を主催し、現在では世界遺産エリアを中心に6つの市民ガイド団体が活動しています。ガイドが観光客と同伴することで、文化遺産への理解が深まるだけでなく、文化遺産をめぐる禁忌事項も遵守されやすくなるようです。

北海道でもアイヌ文化遺産のガイドツアーが行われています。平取町では、重要文化的景観ガイド（地域ホスト）の育成が開始され、地域ホストがおもてなしをするモニターツアーが数多く実施されています。地域に残る口承伝承や、アイヌ文化に伝わる伝統的知識を盛り込んだガイドは、観光客が地域の文化遺産をより深く理解する一助となっています。

先住民文化遺産観光の課題

知床ではアイヌ民族ガイドが口承伝承を交えながら遺跡を紹介したり、旭川でも市博物館主催でアイヌ語地名ツアーが実施されたりするなど、民族文化を活かしたツアーの取り組みが広がりつつあります。一方で、先住民文化遺産観光における課題も指摘されています。たとえば、全道的にみると未だエコツアーへの需要が高く、またアイヌ文化への認知度が低いことから、アイヌ文化遺産ガイドのみで生業として成り立たせるのは容易なことではないようです。

また、先住民文化遺産観光において聖地と観光客の適切な距離感を保つことも課題の一つです。精神文化は各文化の基層をなす重要な要素であると同時に、琉球文化では御嶽（ウタキ）、アイヌ文化ではチャシやチノミシリといった信仰に関する空間は、通常外部者がそれをみだりに犯すことは許されていません。しかし、聖地が観光資源の中に組み込まれれば、外部者の人の目に触れることは避けられません。

世界遺産の斎場御嶽（セーファウタキ）は、沖縄の創成神による琉球開闢七御嶽の一つに数えられ、現在でも地域の人々にとっての祈りの場となっています。2000年に斎場御嶽が世界遺産に登録されると、来訪者が急増したため、観光客が香炉の上に登る、祈りの儀式をさまたげるなどの禁忌行為が御嶽内で多発しました。こうした状況を受け、南城市は2007年に入場前のレクチャー映像の視聴を義務付けたり、御嶽内にガイドを常駐させたりするなど、御嶽内の逸脱行為の見回りと空間の秩序を守るよう努めています。

北海道文化遺産観光の展開に向けた提言

文化庁が2007年に提言した「歴史文化基本構想」は、地域に存在する文化財指定・未指定に関わらず広く捉え、その周辺環境を含めた総合的保存活用の構想です。

沖縄県南城市では、2008年から構想策定のために近隣住民を対象としたワークショップを開き、地域遺産を掘り起こす作業を実施しました。その内容は、一集落最低4回以上、さらに地区役員や区長レベルで数回、若者や女性にも積極的な参加を依頼して回る丹念なものでした。法的保護のない文化財の掘り起こしには時間と人手がかかります。しかし、南城市の丹念な掘り起こし作業は、日常生活にほとんど縁のない文化財と市民の距離を縮め、市民と一緒に地域の文化財の活用方法模索へとつながっています。

北海道では、過去にアイヌ文化振興施策やイオル再生事業といったアイヌ文化・歴史の掘り起こしや復興事業が行われており、「歴史文化基本構想」のような形でそれらを活用すれば、「食」や「開拓」のイメージが先行した北海道観光において、アイヌ文化遺産の価値を顕在化させる基盤となる可能性が考えられます。さらに、道民がアイヌ文化にふれること、そしてアイヌ文化が北海道を代表する魅力の一つであるという共通認識を当たり前を持つことが先住民文化遺産観光発展にとって大切になっていくと思います。

研究発表 2

アイヌ伝承と地名から見た北海道における災害危険箇所^{※2}

貞観地震と東日本大震災

東日本大震災の発生当時、国土交通省に勤務し、福島第一原発が津波に襲われて、数日後に爆発した映像を総理官邸で見ました。その後の議論の中で貞観地震（869年）による津波と同規模と指摘されましたが、それ以前には、貞観地震は、未曾有のことで想定外といわれていました。しかし、何が起こるか分からないのが自然現象です。日本では、100年間に起こる自然現象に対して政府は国民を守るという考え方でしたが、東日本大震災以降、想定外であった現象でも「減災」という概念が明確に示されています。



南 哲行 氏
(一社) 全国治水砂防協会 常務理事

アイヌ文化から読み取る自然現象と災害の歴史

北海道においては明治以前の災害記録が乏しいので、貞観地震まで遡ることができなくとも、アイヌ文化の中に何らかのヒントが残されているのではないかと調べました。

一つは、防災のヒントに繋がるアイヌ語の地名がないかを探したことです。地名に残すには、災害頻度が大きいということが言えます。もう一つは、古文書がなくても伝承として、先祖が子孫へ身を守るための教訓、すなわちその中にいろんな自然現象が織り込まれているのではないかと考えました。そして、最後に事例検証という組み立てにより研究を行っています。

アイヌ語地名に残された災害危険箇所

山田秀三先生の文献によると、アイヌの方々には地形の特徴を表して土地に名を付けていることが多い。

札幌の「サツ」は「乾いた」、「ポロ」は「広い、大きい」という意味で、豊平川の扇状地に大きな石がゴロゴロとある状態を言ったようです。十勝地方の札内川も、川に石がゴロゴロと転がり、そこでは石を運ぶ大水や山崩れの現象で災害が起きたと見るべきです。

千歳の支笏湖畔にポロピナイ川があり、一見、美しい印象を受けますが、今でいう土石流危険溪流と名付けたのと同様です。一昨年には土石流が発生し、長期

に渡って国道が不通になっています。

豊平は、「トイ・ピラ」、「崩れる・崖」。現在の豊平川をJR付近から見ると安定した川に見えますが、上流は崖地が連続し、それが崩れ中流部に堆積しサッポロと名付けられたと思います。上流域では、現在、開発局によって直轄砂防事業がなされています。

新十津川町を流れる徳富川の「トック」は「隆起」、「隆起」は「地すべり」を意味し、現に徳富川では大きな地すべり地が連続しています。

1977年の有珠山噴火の際、道庁職員として有珠山で仕事を行っていた時、トコタンという集落が、少し盛り上がった所がありました。当時から気になっていたこのトコタンは、アイヌ語で「廃村」を意味し、そこは火砕流によって消失された地区でした。

「カムイ」、神の住むところであって何が起こるか分からない、だからカムイが付くと怖いところという意味が込められていると考えています。

子孫へ伝える伝承

長い時間の中で起こる現象は子孫に伝承として伝えられ、文献には荒唐無稽と感じるようなものも書かれているが、ある程度災害履歴のヒントを文献から読み取れると考えました。okimumpeは山津波のことをいっています。日高山脈一帯は2つの島がぶつかって隆起したともいわれ、当然、隆起した山は崩れやすいためそのような伝承が多いと思われます。

例として、沙流川に津波と山津波が同時に襲来したが、避難した人しか助からなかった教訓として記載されています。また、鶴川では、融雪期の地すべりに関する前兆現象として、春先に雪玉を割り、中に泥が詰まっていると危険という伝承が残されています。

千歳での事例検証

事例検証では、昔、山津波によって千歳神社の近くの山がもぎ取られ、馬追山にぶつかり石狩川に沿って流れていき海へ出ていったとされる伝承です。

土砂は水で押し流され下流へと運ばれますが、この事例では、ダムアップにより決壊し流されるたことが考えられます。その要因には山体崩壊と噴火が考えられ、その崩壊した土砂が支笏湖に入り、湖水が千歳川に乗り越した。また、樽前山の噴火では、一面が火山

※ 2 18ページ参照。

灰で覆われ、火山灰の重みで倒れた木が、一気に流れ、それまで河床に溜まっていた砂礫^{されき}を押し流して千歳市に堆積したという仮説です。

千歳市のサーモンパークにおいて、当市が行っていたトレンチ掘削現場を借りて調査しました。その掘削断面には降下火山灰の層の間に砂礫層があり、そこに含まれていた木片の年代測定を行うと1700年くらいのもので分かり、樽前山の噴火とも年代が大体一致します。この調査手法では、トレンチ掘削を市内広域で行うことで面的な確かな情報となり調査精度が高まります。

このようにアイヌ伝承や地名は防災にある程度役立つというのが結論です。もう少し丁寧な調査を行うことで、危険箇所の推定や行政の大規模災害への危機管理計画に有効な情報になると考えています。

研究発表 3

ツーリズムによる農村と都市との創造的関係の構築に関する研究^{※3}

～ワインツーリズムの事例分析を通して～

ワインツーリズムによる都市と農村の新たな関係

日本のワイン文化は、明治以降150年ほどの比較的新しい文化で、道内池田町のワイン生産も50年程の現代文化です。

日本で「ワインという新しい文化」をつくるのが都市と農村の関係を原動力になると考え、人口減少・少子高齢化が進む農村における生産活動を観光対象とした、ワインツーリズムを研究しました。それは、都市と農村の社会構造を大きく変える可能性を持っています。

現在、農村と都市はお互い「分業」しており、自然や生産物を農村から都市へ提供するかわりに、都市から農村へ対価の支払をする「役割分担の関係」が成立しています。しかし疲弊する農村地域が目立つように、農村と都市の固定した関係は、双方にとって問題となっています。そこで、その関係を変えることができるのが、この研究のポイントです。

田舎や農業について言えば、OECD各国の土地の



敷田 麻実 氏
北海道大学観光学高等
研究センター教授

75%がいわゆる田舎で、EU25カ国の96%が農地です。しかし、農業就業者は就労人口の13%にすぎず、地域の総生産に占める農業の割合は6%でしかありません。

原動力としてのツーリズム

ツーリズム（観光）の特徴は、観光資源の開発が容易で、当初の開発コストが低いということです。また、観光は特別な資格や要件なく、参入できる分野であるということもあります。さらに観光客側が移動し、訪問先で消費してくれるので、輸送コストが消費者側の負担という特徴があります。

新たな文化の創出へ

近年、体験観光をはじめ、エコツーリズムなどの新たな観光が生まれ、ガイドなどによるエンターテイメントを楽しむスタイルに変わってきています。しかし、それはガイドという専門家の創造性を楽しむ観光であり、観光客自らが創造的な活動をする「クリエイティブツーリズム」はまだ例が少ないのが現状です。ワインツーリズムは、このクリエイティブツーリズムの例として注目できます。

ワインやワイナリー、^{ぶどう}葡萄畑を地域資源に、ワインを愛好する観光客にワインを提供するのがワインツーリズムです。都市から来る観光客にとっては、楽しみたいからワイナリーに行くという、極めて個人的な自己投資行動です。しかし、ワインツーリズムによる利益の一部が、うまく地域資源に還元されれば、それは社会的な意味を持つ「社会的投資」になります。

ツーリズムは、都市から観光客が移動し、訪問先の地域資源であるワインを飲みます。そこに交流の要素が入ることで、地域側と都市側が協働して文化を創出できます。そこには都市と農村の固定した役割分担はありません。ワインを飲む消費者の持つ文化と生産する文化、景観を含めた地域資源が交差することで新たな文化を創出します。

ワインツーリズムを事例とした三つの理由



八反田 元子 氏
北海道大学大学院国際
広報メディア・観光学院
博士後期課程

ワインツーリズムを事例とした理由には、次のことがあります。

① ワインは土地との関連が深く、付加価値の高い製品で、土地の個性が製品に表れる。さらに、ブドウ栽培

※3 本誌2014年12月号20ページ参照。

培地で製品化するのが、理想とされている。

② ツーリズムの特性として、製品だけではなく景観、イベント、体験、地域の記憶などを含めた多様な観光対象がある。

③ 社会的動向として、地域振興策の柱と位置づける、自治体等が増加している。

ワインツーリズムは、1996年、ホール氏によって“ワイン産地を訪れ、ワインとそれに関連の施設やイベントを楽しむ仕組みや考え方”と定義されています。

事例対象地域の概要

事例対象地域には、池田町、都農町^{つのおちう}、空知南部の三笠市と旧栗沢町（岩見沢市に合併）を含む岩見沢市を取り上げました。

池田町

池田町は、財政再建団体に指定され、財政の立て直しを目的に、山ブドウを原料にワイン生産の事業化を図りました。半世紀にわたり、無借金、黒字経営を続け、「ワインのまち池田」を全国に知らしめました。注目すべきことは、延べ5%の町民をヨーロッパのワイナリー視察に派遣し、本場のワインを体験することを通して、町内の消費需要を開拓したことです。

都農町

宮崎県都農町は、全国的に有名なワイナリーで、イギリスのワイン専門誌でも「お買い得なワイン」として高く評価されています。

都農町では、地域の農業を守るため、ブドウ生産者から原料を一定価格で買い取っています。製品の95%が宮崎県で販売されており、ゴルフ・野球・観光などでの、県外からの来訪者を含めた消費需要の開拓をしています。

空知南部（岩見沢市・三笠市）

空知南部では、民営の小規模ワイナリーが集積し、個性的で良質な製品を生産しています。1998年、この地域の農業者が、北海道での栽培は難しいとされていた、ピノワールによるワイン生産に着手し、その製品が専門家に高く評価され、ワイナリーが集積する契機となりました。消費者との関係構築において、生産者の主体性が注目される地域です。農家戸数と耕作面積では0.1%と僅かですが、行政も「ワイン生産地域」

としてのイメージを打ち出し支援しています。

アンケート調査の結果と概要

札幌市と東京都に在住する1,024人を対象に、インターネットによるアンケート調査を実施しました。対象の内訳は、ワイナリーに行ってみたく「希望者」と行ったことがある「体験者」が、同数の512人です。

ワイナリーに関する情報源については、調査方法の影響もありインターネットとの回答が最多でした。次に多いのは、「希望者」ではテレビであり、映像を通じて情報を入手しているようです。「体験者」ではテレビとの回答数は「希望者」に比べ少なく、様々な情報をもとにワイン産地を訪れています。

次に、ワイナリーを訪ねる理由については、「希望者」は、試飲・購入・限定品の購入といった「モノ」を指向している傾向が認められます。一方、「体験者」は試飲のほか、ドライブでのワイナリーへの立ち寄りを含め、訪問の目的が多様です。

総合考察

総合考察として、以下の点を挙げたいと思います。

- ① 生産活動を対象とするワインツーリズムでは、生産活動の意味や来歴を、生産者だけではなく、地域住民が理解し、誇りをもって来訪者に伝えること。
- ② 生産者と消費者の交流を通して、文化形成の歴史を踏まえ、相互の潜在力を引き出し、新しい文化とともに形成すること。
- ③ 有形の「モノ」以外の、無形の地域の歴史や地域の記憶も、創造的関係の構築を築くうえで有意な資源とすること。
- ④ 多様なステークホルダー（地域社会を含めた利害関係者）の参加で、地域の誇りを醸成し、ワインツーリズムの持つクリエイティブな側面を活かすこと。

この研究が意図したところは、自己投資を目的とした観光行動が、訪問先の地域社会における生産者と消費者の交流をもとにした関係構築を通して、双方の潜在力を引き出し、社会への投資となり地域課題を解決する方向に作用をすることにあります。今後も、こうしたツーリズムが持つクリエイティブな側面について、研究を深めていきたいと考えています。

（発表者の所属は、発表時のものです）